

O-0374**慢性運動器疼痛患者の特性****疼痛の理学療法評価確立に向けた多施設共同研究**

松原 貴子^{1,5)}, 西上 智彦²⁾, 沖田 実³⁾, 坂本 淳哉³⁾, 信迫 悟志⁴⁾, 城 由起子⁵⁾,
森岡 周⁴⁾, 牛田 享宏⁵⁾

¹⁾日本福祉大学健康科学部, ²⁾甲南女子大学看護リハビリテーション学部,

³⁾長崎大学大学院医歯薬学総合研究科, ⁴⁾畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター,

⁵⁾愛知医科大学学際的痛みセンター

key words 慢性疼痛・運動器・疼痛評価**【はじめに, 目的】**

疼痛は理学療法士が問題とする主要 3 障害に含まれる(日本理学療法士協会『理学療法白書』, 2010)。慢性運動器疼痛は厚生労働省国民生活基礎調査の有訴者調査において過去 10 年以上にわたり上位を占め続け、その順位、有訴者数ともに改善の兆しはみられていない。このような慢性運動器疼痛の増加・難治化傾向は諸外国の報告でもみられ、世界的規模の問題といえる。このような中、疼痛の理学療法(PT)において機能的行動分析および心理社会的スクリーニングを含めた包括的評価が必要といわれている(国際疼痛学会)が、本邦ではこれらの要綱を満たす PT 評価は行われていない。そこで、我が国における慢性運動器疼痛に対する PT 評価法の確立に向けたパイロットスタディとして、慢性運動器疼痛患者の機能的行動および心理社会的要因について検討した。

【方法】

対象は全国 16 施設にて外来 PT 通院中の慢性運動器疼痛患者 243 名(男性 86 名, 女性 157 名, 平均年齢 64.2 ± 13.9 歳, クリニック受診 80.2%)であった。疼痛の部位・強度(numerical rating scale: NRS)・持続期間、機能的行動評価として疼痛生活障害評価尺度(pain disability assessment scale: PDAS)、運動恐怖尺度(Tampa scale for kinesiophobia: TSK)、日常的な 1 週間当たりの活動量を示す国際標準化身体活動質問表(International physical activity questionnaire: IPAQ)、心理社会評価として不安・抑うつ尺度(hospital anxiety and depression scale: HADS)、疼痛自己効力感尺度(pain self-efficacy questionnaire: PSEQ)、疼痛カストロフアインジグ尺度(pain catastrophizing scale: PCS)、健康関連 QOL 尺度(EuroQOL 5 dimension: EQ-5D)、教育歴、家族構成、年取、疼痛の直接・間接医療費、通院期間について調べた。各項目間の相関の解析は Pearson の相関係数を用い、有意水準を 5% とした。

【結果】

疼痛の部位は腰、肩、膝が多く、強度は NRS 4.8 ± 1.9 、持続期間は 54.1 ± 81.2 か月であった。PDAS は 19.2 ± 12.0 、TSK は 40.5 ± 6.2 、IPAQ は低強度活動 468.2 ± 876.4 、中強度活動 124.2 ± 266.5 、高強度活動 15.2 ± 59.7 、合計 606.2 ± 944.6 分/週であった。HADS の不安は 6.2 ± 4.1 、抑うつは 6.4 ± 3.6 、PSEQ は 36.6 ± 12.9 、PCS の反芻は 12.9 ± 4.4 、無力感 6.6 ± 4.5 、拡大視 4.7 ± 3.0 、合計 24.2 ± 10.4 であり、EQ-5D は 0.693 ± 0.135 、中学・高校卒、同居家族有、医療費は直接 5,000 円以下、間接 1,000 円以下が多かった。次に、疼痛強度は PDAS、TSK、HADS、PCS、EQ-5D と弱い相関($r=0.397 \sim 0.199$)を認め、PDAS・TSK は HADS、PCS、EQ-5D と中等度から弱い相関($r=0.633 \sim 0.353$)を認めたが、IPAQ はほとんどの項目と相関を示さなかった。

【考察】

今回の対象は主にクリニックに通院できている中等度の運動器疼痛患者であり、WHO ガイドラインの換算基準および厚生労働省『健康づくりのための運動基準』を上回り日常的に中等度の活動量を維持できている者が多く、心理社会的要因にも著明な問題特性はみられなかった。一方、機能障害や運動恐怖は境界値を超えており、さらに心理社会的要因と中等度、疼痛強度と弱い相関を示すことから、慢性運動器疼痛患者は恐怖-回避思考や活動制限とともに心理社会的問題を含め疼痛の悪循環を助長するリスクを有する可能性が示唆された。したがって、機能的行動および心理社会的要因を含めた包括的評価は運動器疼痛の PT 診療に必須であると考えられる。

【理学療法学研究としての意義】

我が国の疼痛 PT において、機能的行動分析および心理社会的スクリーニングを含めた包括的評価によって各運動器疼痛患者の特性を分析し、適切な治療介入へ結びつけることの意義と必要性を明確にできた。